



セヴラック通信

Courrier de Séverac

第10号

2011 前期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

16

第16回例会
2011年6月25日(土)
衍芸館

プログラム

例会

15:00-16:40

【お話とスライド】

松本智勇

南仏セルダージュ地方の教会建築と歴史

【演奏とお話】

末吉保雄

セヴラック：歌劇《風車の心》について その4

森 朱美 (S) ・ 鎌田直純 (Bar) ・ 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：歌劇《風車の心》第1幕第4場より

Déodat de Séverac : Extrait de "Le coeur du Moulin" Acte 1, Scène 4, Poème de M. Magare

～休憩～

【演奏】

浜中浩一 (Cl) ・ 館野 泉 (Pf)

エスカンデ：《プレイング・チェス》クラリネットとピアノ（左手）のための

Pablo Escande : "Playing Chess" for Clarinet and Piano left hand

ジェラルド・プーレ (Vn) ・ 深尾由美子 (Pf)

ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ

Claude Debussy : Sonate pour violon et piano

セヴラック：《ミニョネタ》フィゲラスの思い出

Déodat de Séverac : Minyoneta, Souvenir de Figueras

懇親会

17:00～

〈寄稿〉 再びセヴラックの故郷を想う ● 鎌田和夫	4
〈寄稿〉 第16回例会に寄せて ● 深尾由美子	8
〈連載〉 セヴラック随想 ● 濱田滋郎	11
〈連載〉 セヴラックと私 ● 平原あゆみ	14
第15回例会の報告 ● 鎌田和夫	15

〈寄稿〉再びセヴラックの故郷を想う

鎌田和夫

福島第一原発から西へ約48キロほど離れた福島・三春町に住む80代の老夫婦の話が新聞記事に掲載されたのは5月はじめでした。その老夫婦が体験した恐怖の記録を要約してみます。3月11日に発生した東日本大震災の翌12日、原発の周辺自治体に避難勧告が出されました。その時、その老夫婦は25年前に起きたチェルノブイリ原発事故後に買い求めた放射能の線量計で、実際に測りはじめたというのです。また、今も記録を取り続けているようです。線量計から警告音が発せられる度に死の恐怖に震え、死を覚悟したと言います。

ご承知のように放射能の線量計は一定の基準を超えると警告音を発し、その場には危険だと知らせてくれるわけですから、いたたまれない思いをされたに違いありません。12、13日の線量計からの数値は基準スレスレだったのですが、13日には1号機が水素爆発を起こしていました。

翌14日の朝6時から夜11時までは警告音が22回も鳴ります。その日は3号機が水素爆発。

翌15日には午後1時半から毎分鳴りっ放しの状態となり、その10分後には4倍、さらに10分後には15倍に数字がはね上がり、さらに1分ごとに猛烈な勢いで上昇をはじめ、午後2時16分には通常の居間の数値と比べ57倍もの放射線量になったというのです。このまま死ぬのではないかと老夫婦は畳にへたり込んでしまったと述懐します。その後も50倍から40倍の放射線量を記録し、ようやく午後4時になって数値は15倍に下降していったそうです。

その15日には2号機の圧力抑制室が損傷し、4号機が水素爆発を起こしていたわけですから、すでに福島第一原発は瀕死の状態にあったわけです。それでも国や東電は事故の重大性を一般に知らせず、常に後出しジャンケンポンを繰り返すばかりで、どこまで真実を伝えているのか疑問になります。あくまでも48キロ離れた三春町の老夫婦の記録が真実の数字を伝えてくれていたのです。

また、4月2日には高濃度の放射性物質を含んだ汚染水を海へ大量に放出し、いや、垂れ流し「どこから漏れ出ているか判らない」と平然と暢気に他人事のような返答を繰り返す東電。そういう対応を見ていると放射性物質と同質の恐怖を覚えてしまいます。驚き呆れるばかりです。

つい先日、作家の村上春樹さんがスペインのカタルーニャ国際賞の授賞式のスピーチで「原発に疑問を呈していた人には”非現実的な夢想家”というレッテルが貼られた。(略) 夢を見ることを恐れてはならない。(略) 力強い足取りで前に進んでいく”非現実的な夢想家”でなくてはならない」と述べていました。そうですね、決して力強くなくてもいいから、いつも通りに浮遊しながら脱原発を唱えていかなければならないと思っております。

老夫婦の住む三春町は周知のように喧騒のない素朴で落ち着いた風情を残した城下町です。梅と桜と桃の花が同時に咲くことから三春と名付けられたと言われるほど、古き良き時代の洗練された静かな佇まいが魅力です。放射性物質が漂う4月には樹齢千年余の「三春滝桜」(べ

ニシダレザクラ) が咲き誇りましたが、これで見納めとならないことを祈るばかりです。三春駒や三春人形など素朴な張子の民芸品などにも郷愁を誘われる情緒の漂う町を消してはなりません。この三春はセヴラックの故郷サン＝フェリックス・ロラゲと通ずる穏やかな田舎町の自然の香りがします。そうした故郷が放射性物質に汚染されたら、日本もオシマイですね。

再びセヴラックの故郷を想いながら、ヒマワリの話をしなければならなくなりました。サン＝フェリックス・ロラゲとアルルと三春のヒマワリのことです。順序が後先になってしまいますが、三春には福聚寺という寺があり、その住職が芥川賞作家の玄侑宗久さん。その彼がヒマワリの話を見聞紙上で語っていました。スリーマイル島とチェルノブイリ原発事故の後、放射性物質に汚染された土壤にヒマワリと菜の花を植えてみたところ、土壤が嘘のように蘇ったと言うのです。どうやら放射性物質を取り込んでしまう優れた吸収作用があるらしいのです。そこでヒマワリの種を農地や校庭などに蒔こうではないかと提案していたのが東日本大震災復興構想会議の委員でもある玄侑さんだったのです。今、日本でも特に三春町でヒマワリが注目されているのです。

その記事を読みながら、サン＝フェリックス・ロラゲを訪れた時に眺めたヒマワリの海の光景が思い出されたのでした。彼の地を館野先生がはじめて訪れた時の印象を「豊かな大地が海のように波打っている。そして、それがほとんど全面向日葵の畑！ もう花の盛りは過ぎていたが、圧倒的なその輝きと、中世からの静かな時の流れが身を包み、言葉もなかった」とセヴラックのCDジャケットの中で、大いなる感動を込めてヒマワリへの賛辞を書かれていました。その表紙には館野先生が自ら撮られたヒマワリの海の写真が連なっていたことも思い出されました。

サン＝フェリックス・ロラゲを訪れた私たちセヴラック協会のメンバーは、そのヒマワリの海の光景に目を奪われたものでした。なだらかな丘陵が果てしなく続く草原の青と空の青と、どこまでも一体になりながら、ここからが空で、ここからが大地ですと教えてくれたのがヒマワリだったのです。あの時、美人運転手さんの粋な計らいで途中停車してくれて、ヒマワリの海を心ゆくまで堪能させてくれたのでした。その上、最後の別れ際には本物のヒマワリを一人一人に一輪ずつプレゼントしてくれたのですから、感謝の言葉もありません。我家の一輪挿しにヒマワリを枯れ落ちるまで生けていたのが、ついこの間のことのようにです。愛すべきヒマワリを写真に収めましたので、時折眺めています。

その旅の折には放射性物質とヒマワリは結びついていませんでした。フランスが58基の原発を保有していることは知っていましたが、まさか放射性物質に汚染された土壤を改善してくれるのがヒマワリであるとは考え及びませんでした。フランス政府は想定外を見越してヒマワリ畑を多く作っていたのでしょうか。いえ、それは違いました。それはゴッホが弟テオに宛てた手紙から伺うことが出来ますから。

ゴッホが南仏アルル郊外でヒマワリ畑を最初に眺めた時「日本に来たような気がする」とパリに住む弟テオに書いていたのです。パリの喧騒から逃れて来たゴッホの120年前の印象でしたが、その頃の日本は自然と見事に調和した国であったのですから、浮世絵に傾倒していたゴッホの鑑識眼には間違いはなかったはずで、とても真実に近い正しい受け止め方であったといってもいいのではないのでしょうか。

ヒマワリの海の光景は変わることなく、僕の胸に優しく蘇って来ますが、フランスに継いで三番目の原発保有国である日本には54基もありながら、ヒマワリ畑はフランスほど多くないと思われまます。第一、こんな狭い日本に原発の数が異常に多いと思いませんか。ずうっと気掛かりでなりませんでした。その上、プルサーマルまでの原子炉を造り稼働させようとしているのです。危険極まりないことは従来から言われていることでした。ところが、アメリカの言うとおりに従う日本は、目先の金の亡者ばかりを増やして来ました。そのツケが大震災で明らかになり、判りやすくなっただけかもしれません。現実を把握できない政治家や経済人たちの節操のなさには呆れるばかりです。この原発の危機に際しても原発推進を高らかに唱える経団連会長がいるかと思えば、地下式原子力発電所政策推進議連を立ち上げた元首相や元閣僚級のメンバーらの節操のなさには怒りを覚えます。狂っています。大バカも通り越しています。全く危機感もなく、平然と自然破壊を繰り返しても構わない連中に、この国を任せているのが間違いであることに僕たちは気付かなければなりません。野放図に危険極まりない輩に日本を任せていたために、このていたらくな有様なのであります。

今こそサン＝フェリックス・ロラゲの地区議会議員になったセヴラックのような人が必要ではないでしょうか。「彼の音楽の奥に感じられる大自然と人間の一体感、そして何よりも、彼の自然人としてのあり方が心に触れたのだと思う。(略)セヴラックの音楽が真の意味で健康で自然で、(略)世界と人生を大きく抱擁し肯定する精神にみちていたからだと思う。それはとても素敵な香りに溢れている!」と館野先生は書いています。セヴラックを心から愛する先生のような方が、もし議員でいらしたら、きっと健康で自然な日本の再生が可能になるのではないかとさえ夢想したものです。

ヒマワリ 鎌田和夫

哀しみは苦しみの中に	哀しみの苦しみの中で
苦しみは哀しみの中に	苦しみの哀しみの中で
心の傷を残しながら	ヒマワリの海の底で
大地のヒマワリは	ひたすら祈りを奉げ
地平の果てまで続き	瞬く涙の星々と
天空の果てまで続き	哀しみを分かち合い
沈黙の海	苦しみを分かち合い
ヒマワリの海	どこまでも流れ逝き
さざ波のように連なり	どこまでも沈み逝き
癒しの墓のように連なり	ヒマワリの海の中を
いつか三十三間堂の	独り流離っている
千体千手観音立像群となり	
死者の御霊を吊い	
消えることのない	
癒えることのない	
心の傷を慰め	
心の哀しみを	
心の苦しみを	
微笑みandraげ	

アメリカ大陸からもたらされたヒマワリはスペイン人によってヨーロッパ諸国に伝えられた際「インディアンの太陽の花」「ペルーの黄金の花」などと呼ばれていたそうですが、いつからか「太陽について回る花」と称されるようになったとか。ギリシャ神話によれば太陽の神アポロンに恋した海の精クリティが恋に破れ、9日間も土の上に立ち尽くしてアポロンを見つめていたためにヒマワリになってしまったというのです。

ところで、この神話の設定を少し替えてみたらどうなるか。海の精クリティは恋に破れ、自暴自棄となり大暴れしたものだから、太陽の神アポロンはクリティを諫め、ヒマワリにし、原発の事後処理をまかせた。そうしたところ身を呈して献身的に働き、励んだ、という設定にしてみたら、ヒマワリの役割がはっきりし、些細でありながらも希望が少しでも見えるような気がしないでもありません。

今のサン＝フェリックス・ロラゲはどんな風でしょうか。きっと空は青く澄み、豊かに丸みを帯びた丘陵の草原は陽光に青く濡れ光ったように輝き、うねり、鳥たちは天空を自由に飛びまわっているのではと思います。すくすくと育ちはじめたヒマワリも陽光をいっぱい吸い込み、開花を待ち望んでいることでしょう。この自然を大切に守らなければなりません。放射性物質に汚染されてしまったら自然に近付くことが出来ないなんて、そんな理不尽なことがあるものではないでしょうか。しかし、ヒマワリは危険を承知の上で自らを犠牲にし、被爆し、危険な花になってしまう。実に健康な花です。見習わなければならないとさえ思います。

因みにヒマワリの花言葉は大小によって異なりますが、小輪は「光輝」「愛慕」と素晴らしい言葉になりますが、大輪になると「偽りの富」「にせ金持ち」となり、今の政財界官界の原子力村の人々の顔が浮かんで来ます。我々が運転手さんからプレゼントしてもらったヒマワリは間違いなく小輪でした。ホッとしています。セヴラックのように自然を愛し、健康な心を宿しながら生きて行くことが如何に大事であるかということ、この日本の惨状を前にしながら哀しく想う日々であります。

透明な四季

鎌田和夫

透明に沈黙したまま

三月の花の中に潜んでる

透明に息を殺しながら

四月の林の中を歩み寄る

透明に流離いながら

五月の草の中にもぐり込む

透明に足音を立てず

六月の雨の中を跳ねている

透明に涼しげな顔で

七月の朝の中に溶けている

透明に知らん顔して

八月の森の中に遊んでる

透明に気付かれぬまま

九月の月の光を浴びている

透明にすっとばけたまま

十月の風の中を漂ってる

透明に明るい顔して

十一月の落葉の中に隠れてる

透明に謙虚そうにしながら

十二月の空に浮かんでる

透明に凍えながら

一月の氷の上を滑ってる

透明に震えながら

二月の雪に足をとられてる

透明な四季に

季節を求めても

四季は訪れず

透明な物質だけが浮遊し

亡骸だけが積もり逝く

第16回例会に寄せて

深尾由美子

§ セヴラックのヴァイオリン曲 地中海の陽光と風

セヴラックの魅力的なヴァイオリンとピアノのための小品、《ミニョネッタ（フィゲラスの想い出）》と《セレの想い出》の楽譜に出会ったのは、日本セヴラック協会の例会であった（キングインターナショナルの宮山氏所蔵）。

《ミニョネッタ》の副題にある〈フィゲラス〉はカタルーニャの地名で、濱田滋郎先生によると、イチジクの生えるところという意味があるらしい。この地をセヴラックは、親しかったブランシュ・セルヴァ（ピアニスト）やシャルル・ボード（スコラカントルムの創始者）らと訪れている。〈セレ〉はいわずもがな、晩年の彼が居を構えたピレネー山脈を臨む閑静な美しい街。サクランボの産地で、闘牛場があり、その風景を愛してピカソやブラックなどのキュービズムの画家たちが集まった。どちらもフランスとスペインにまたがるカタルーニャ地方の街である。

曲の中にはFiér（＝誇り高さ）を象徴するスペイン風の3連符リズムや、どこか懐かしい〈歌〉が聞こえてくる（それは、同じカタルーニャ地方の作曲家モンポウも親しみを込めて作品のなかで登場させている）。その独特な雰囲気、「光と影」のコントラスト。「音楽で愛する土地を描きだしたい」と語ったセヴラックの世界がここにある。

§ 音と色彩 一晩中でも聴いていた音

リヨン留学中のことだ。ある演奏会で聞いた若いチェリストの音が、今でも忘れられない。柔らかでニュアンスに富み、体中が暖かく包まれるよう音。一晩中でも聴いていたと思った。

ふだんの生活で耳にするフランス語は、歌うようなイントネーションがあった。小声でささやくようにそっと話しかけられると、なんとも粹であった。教会で歌われていたミサは、柔らかいなかにもアクセントがピリッと効いていた。留学中に、私の耳は繊細な美しいものと出会った。

「音」の響き方は、気候や建築スタイルに深い関係がある。ヨーロッパの乾いた空気、そして石造りの建物のなかでは、楽器はよく響き、小さな音から大きな音までのダイナミックレンジが広がる。それゆえ、音の色彩や表情といった表現の可能性も広がり、柔らかい音、色彩、音の表情を創りやすい。フランスと日本を往復していると、日本では、湿度と木造建築、低めの天井で音の響きがデッドになり、ダイナミックレンジや表現の幅も狭くなる傾向があることを感じる。

ピアノシモの演奏技術

よく響くところでは力まなくても音量が出る。だから硬い音になっていないか、また響きが混じってしまわないように、常に"耳"でコントロールしなければならない。ピアノシモ、芯のある弱音、柔らかい音…は、指先のコントロールが必要だ。筋力も要する。フォルテを出すよりやさしい技術ではない。楽に、肩の力を抜いて、それでいて指先はしっかりしていなければならない。

あるレッスンでのことだ。ミスなく、朗々と弾ききったつもりの私に先生は「saturer! 音がでかい! 飽き飽きだ!」と怒った。当初はその意味がわからなかった。しかし今思えば、それは確かに一晩中は聞いていられない音だったはずだ、20分でそう言われたのだから!

カタルーニャ人のピアノの師テレサ・リャックーナ先生は、「画家が色彩を作り、彫刻家がレリーフを練り上げるように、ピアニストは指先で色彩、歌、表情を作りなさい (timbre!)」と常に求められた。彼女がアルベニスやグラナドスを弾いてくれたときの、指先から紡ぎだされるキラキラとした音は、強弱という域を越えて、「温かさ」や lumière (陽光) を表現していた。

§ ジェラルド・プーレ氏との出会い ピアノシモの芸術

ジェラルド・プーレ先生のヴァイオリンを初めて聴いたとき、その音色に「陽光」を感じた。軽やかにして色彩豊か、天使の羽で愛撫されているようなフレーズ……。エネルギッシュであるが決してアグレッシブではない。

一晩中でも聞いていられる、柔らかかで心地良い、あの「音」が聞こえてきた。耳元で鳴る弱音は美しく、心の奥底のひだにまで届き、どこか哀愁が漂っている。まさにピアノシモの芸術だ。優秀なヴァイオリニストはたくさんいるが、プーレ氏のような薫り高いヴァイオリンの音にはめったに出会えない。その訳を知りたくてプーレ氏に尋ねた。

「一言で説明することは難しいが、私は数十年にわたり、常により美しい「音」を飽くことなく求めてきた。発見したことを実現するために、常に耳で聴きながら〈ヴィヴラート〉の工夫を重ねてきた」。

ヴァイオリニストの指先、手首、腕、そして全身全霊から出る多彩なヴィヴラートは、ピアニストが指先で色彩、表情を創り出す作業 (timbre) と同じことなのだろうか。

音の色彩

プーレ先生が、東京でラロのスペイン交響曲のヴァイオリン・ソロパートを演奏したときのことだ。生き生きとした明るい音色がオーケストラの響きに光を放ち、音楽全体が輝き始め、会場が、太陽の国スペインになったような錯覚を覚えた。頭上に鳥たちが集まってきた、さえずりだした……。

セヴラックの音楽にある地中海の陽光や風を表すためにはどうしても、プーレ先生の音が必要だと私は思った。

「プーレ先生、私とセヴラックを演奏していただけますか！」とお願いし、先生とのお付き合いが始まった。そして艱難辛苦の末、セヴラック、サラサーテ、ファリャのヴァイオリンとピアノの作品集のCDが誕生した。

先生は、セヴラックのヴァイオリン曲を〈美しい国の陽光あふれる音楽〉と讃えて、CDを、〈Le soleil des Pyrénées（ピレネーの太陽）〉と名付けてくださった。CDはフランスでも好評を博している。

§ プーレ先生とドビュッシー、セヴラック

ジェラルール・プーレ先生の父ガストン・プーレ氏は、ヴァイオリニストで指揮者だった。ドビュッシーがヴァイオリンソナタを作曲する際に協力し、ドビュッシーといっしょに初演した。プーレ先生は、このソナタの解釈や演奏法を父から伝授されたという。

先生の幼少時、パリの自宅には父と親交のあったアルベニスやファリャらが入り出していた。当時、スペインの作曲家たちはパリに集まった。南に位置するスペインの太陽と芸術は、パリの憧れであった。

その太陽こそが、セヴラックが讃えた明るい気候風土や人々の心の温もりを育んだのだ。その芸術は私には未開拓の宝庫のように映る。ドビュッシーの作品にはスペイン的な断片——彼はゴヤの芸術に魅せられ、アルベニスのイベリアは座右の銘としていた——がしばしば登場することも思い出す。

ジェラルール・プーレ氏の演奏からは、その時代の香りが漂ってくるにちがいない。

〈演奏会案内〉

ジェラルール・プーレ & 深尾由美子 in 鎌倉

日時：2011年12月11日（日）

会場：鎌倉イーゲルホール

曲目：ラヴェル、グリーグ他

〈連載〉セヴラック随想

濱田滋郎

私のセヴラック (1)

セヴラックについてぜひ何か書くように、とのお言葉を亀田さんから頂いた。「できれば、なにか特定の作品を取り上げて」とも付け加えられたので、まず浮かんだのは《セルダーニャ》である。と言うのも、けっしてこれが世上の認めるセヴラックの代表作だからではなく、つい先日、東京オペラシティのリサイタル・ホールで、まことにめずらしいこの組曲の全曲演奏に触れ得たからである。平原あゆみさんは、すこぶる真摯に、心の丈を込めて、技術的にも解釈の上でもけっして容易ではない全5曲に取り組んでおられた。おそらく、幸いたくさん集まっていた聴衆のほとんどが、改めてセヴラックの詩魂、その優しさと力強さ、親しみやすさと神秘さに深く打たれたに違いない。

またそれと前後して、私はたまたま、《セルダーニャ》全曲のパイプオルガンによる編曲演奏という、これまたげにも珍稀なディスクを耳にすることもできた。とあるフランス人オルガニストによる編曲・録音である。

そんなことも手伝い、まずは《セルダーニャ》をめぐる、作品や古今のレコーディングに関するくさぐさを綴ってみたいと思うのだが、それに先立ち、いわばイントロダクションとして、僭越ながら私個人の「セヴラック体験」の道すじといったことを、一筆させて頂きたいと思う。

* * *

デオダ・ド・セヴラックの名を私が知ったのは、果たしていつのことだろう。10代後半のことであったのは間違いない——とすれば、1950年から55年（昭和25年から30年）頃。腰や脚が妙に痛む坐骨神経痛なるものにかかったのをよい口実に（？）高校を退学した私は、高音の詰まった家の安物ラジオを無二の友として、朝から晩まで、音楽放送のほとんどを聴いていた。しかも1冊のノートに聴いた曲名、作曲者および演奏者名をすべて書きつけ、特に気に入った曲には◎（これは時に三重丸から五重丸ぐらゐまでエスカレートした）、まあまあと思った曲には○を付するのが習慣となっていた。NHK（第1・第2放送）、いくつかの民間放送、あるいは当時日本にいたアメリカ進駐軍向けの放送、それらのいずれかで流される音楽番組——とりわけクラシック、あるいはタンゴ、ラテン、シャンソン、時にはジャズなどの——をつぶさに聴くのが日課だった。ほかには、さすがに遊んでばかりもいられまい、という気持から本を読んだり語学を独習したりはした。そ

れと、あまり丈夫とは言えなかった母親のため「家事手伝い」をマメにつとめた。父親、「泣いた赤鬼」などを書いた童話作家の廣介は「足が痛いなら無理に学校へ行くこともないだろ。自分でやりたいことがあって、そのために勉強するのなら家に居たってできるだろ」と呑気に(?)言ってくれる親だったから、私はもっぱら、自然に上記のような日々を送れたのである。

さて、そのような中で、セヴラックの名と調べとが初めて私の耳と心に触れたのは、ラジオを通じてか、あるいは本を通じてか、はっきりとは思い出せない。いずれにしても私が17、18歳の頃なのだが。ラジオからだすれば、それは疑いなく、フランス音楽特集だかピアノ小品特集だかの番組に組み込まれていたセヴラック作曲〈ラバ曳きたちの帰り路〉であった。ご承知のとおり、組曲《セルダーニャ》の第5曲（終曲）である。軽やかなリズムに乗りながらもどこか曰く言い難い哀愁と詩情を感じさせる曲だ……と記憶にとどめたことを確かに憶えている。演奏者は誰であったか。ロベール・カサドシュ、と聞いたように思えるのだが、さだかではない。当時放送に使われていたSP盤レコードには、この曲の録音がブランシュ・セルヴァ盤、タリアフェロ盤などいくつかあったはずなので、そのうちのどれかだったかもしれない。いずれにせよ、多分◎を私はつけた。

代って、もし本からであったとしたら、これは疑いなく、1冊がはっきりと浮かび上がる。新潮文庫のうちにあった、三好達治訳になるフランシス・ジャムの散文詩集「夜の歌」である。これの1章が「デオダ・ドゥ・セヴラックとの夜」と題され、このあまり聴いたことのない、フランス人らしい作曲家の面影が、そこに登場していたのである。フランシス・ジャムは、昨今ではとんと忘れられているようだが、昭和時代にはかなり日本でも訳書が出て読まれ、愛好家も少なくなかったらしい近代フランスの詩人（1868-1938）である。カトリックの詩人なのだが、その詩風にはいわゆる抹香臭さがなく、人びとや生き物の姿を優しい眼で見つめる淳朴な抒情詩人、しかも思いのほかの深淵を内に秘めた哲人の趣もある詩風の持主で、もとより訳書を通じてだが、私はいたく惹かれていた。最もよく親しんだのは文庫本にあった堀口大学の名訳になる「ジャム詩集」で中の幾篇かを私はそらんじていた。そして、それと並び、文庫本にかけたカバーに「自分流」のミニチュア・ペン画で装釘を施すほど愛読したもう1冊が、先記、三好達治訳「夜の歌」だったのである。原タイトルは〈Les nuits qui me chantent ...〉だから「私に歌いかける夜々」あるいは「夜が私に歌って聞かせる…」とでもなるのだろうが、日本語タイトルは「夜の歌」と、ただちに捉えやすいものになっていた。その内容は長さがまちまちな30余篇ほどの散文詩を集めたもので、その終りから6番目に「デオダ・ドゥ・セヴラックとの夜」と題された1章がある。ちなみにジャムはセヴラックより5年早く生まれ17年遅く亡くなっているが、セヴラックと同じく南フランスの風土を愛してそこに住みついていたから、触れ合いがあったとて不思議はない。いや、2人が心の通い合う者同士であったことは、ジャムの詩そのものからはっきりと読み取れるのである。

『月の光に申分はなかった。私たち、デオダ・ドゥ・セヴラックと私とは、永らくそれにひたってるた…』（原文のまま）と三好訳は始まる。南フランスの夜の街に漂う青い微分子は、どんな小さな隙間からも忍び入ってくる。猫、ねずみ、ふくろう、こおろぎ…それら「もののけの兄弟たち」である夜の生き物たちも、ある不思議な弾力性をもって、狭い隙間を我物顔に通り返ける。音楽家と詩人とは、そうした魔法の国を侵すまいと爪先立って歩く。そしてふと歩みを止めると、二人の回りには無限の空間の寂寥がひろがる……と、そんな深夜、一人の老いた貧しげな女が住いの戸口に現れた。そして彼女は言ったのだ——「神さま」と（以上、要約）。

『この言葉、それをセヴラックよ、星を鏤めた夜の翼に載せて、私は君に送ろう、君が天國で、ヴァイオリンを手にする毎に、その心をいつも奏でてくれるやうに』（原文のまま）と、ジャム／三好は締めくくっている。

終りの1節から、わかることが二つ。一つは、この詩が書かれたとき、セヴラックはずでに世に居なかったこと。もう一つは、作曲家がピアノ、オルガン以外にもおそらく日常にヴァイオリンすなわちヴァイオリンをも奏でていたこと。そう言えば、ヴァイオリンのための愛すべき小品をいくつか残しているセヴラックではある。

もう一つ、よくわかることがある。ジャムははっきりと知っていたのだ——なんらの飾り気もなく、痛いばかりに真実である貧しい老婆の「神さま」を、セヴラックもまたその音楽の「心」としていたことを。

それにしても、三好訳が作曲家の姓を「セヴラック」と正しく読んでいるのは偉い。と言うのは、当時、彼の姓は日本では「セヴェラック」で通っており、本格的な音楽辞典の類ですら、そう記して平気だったからである。

(つづく)

リレー連載

セヴラックと私

平原あゆみ



あれは桐朋学園大学4年在学中の春だったと思う。

「こんにちは、館野泉です。今日、セヴラックという作曲家の協会の例会があって、あなたにとっても勉強になると思うのでよかったですら来ませんか？」——土曜日の午前中にあの館野先生からお電話があった。館野先生とは1年前のオウルンサロ音楽祭以来お会いしていなかったのが突然の連絡に非常に驚いた。代官山の駅で待ち合わせをして一緒にエナ・スタジオに向かった。私はまだ当時大学生だったため、非常に緊張していたのかもしれない、ガチガチでありあまりその時の様子などは覚えていない。ただ、その日に演奏された鎌田直純さんと末吉保雄先生の歌曲や、久保春代先生の《セルダーニャ》の第4曲目〈リヴィアのキリスト十字架像の前のラバ引きたち〉を聴いて、「なんて素敵な音楽なんだろう…」と深く心に刻まれたことは今でもはっきりと覚えている。

その年の秋の例会で、私はセヴラックの《水の精と不謹慎な牧神》を例会で演奏させていただく機会をいただいた。生まれて初めて弾いたセヴラックの作品である。大学のレッスンで普段弾いていた作品とは違う、なぜか惹きこまれる世界がそこにあった。懇親会もあり、協会の皆さんの温かい雰囲気と触れ、緊張していた私は徐々にほぐれていった。

デビューリサイタルで、組曲《ラングドック地方にて》を弾いたのは5年前のことになる。特に〈春の墓地のひと隅〉の深々と長い息で歌われる、永遠と鳴りつづけるような音の響きに、ピアノはこんな音まで出るんだと、作品から今まで気づけなかったことも教えてもらったような感覚だった。

2007年夏。セヴラックの故郷であるサン＝フェリックス・ロラゲを訪ねることができた。どこまでいっても続く向日葵畑、ゆったりとした農村の風景、素朴な教会の鐘の音、そこには今にもセヴラックがひょいっとやってきそうな町があった。実際にセヴラックの故郷を肌で感じて、《大地の歌》を演奏することができたことは一生の財産になったと思う。

そして先月、リサイタルでセヴラックの最高傑作と言われている《セルダーニャ》をプログラムに入れた。今思うとただ好きだという気持ち一心で決めてしまった。館野先生も「僕もそう思っていた」と言って下さったときに「よかった」と思った。

大学を卒業してからの6年間、私にとってセヴラックとはいつも傍にいて勇気づけてくれるような存在であったような気がする。その優しさこそが作品の魅力だと思う。

第 15 回例会の報告

鎌田和夫

真っ白に射し込む冬の光りはどこまでも明るく輝き、目に眩しく満ちあふれていました。その刹那、葉を落とした小枝の影が陽射しの傾きの哀れを、そっと教えてくれるのでした。空しく心地よい一時を戯れ遊びながら、穏やかな喜びを分かち合える幸せの訪れに安らぎを覚えたものです。生きとし生けるものの尊い自然の温もり。そういう想いの積み重ねが、いかに人の心を育む上で大切なことであるかを思わずにはいられません。

そうしたことの想いに誘ってくれるものの一つに音楽がありましょう。どこまでも自然と共に生きようとするセヴラックの光りは人の心を自由に解放してくれるからです。決して自然を征服しようとしませんから、感謝の心がいっぱい詰まっています。いつまでも瑞々しく生き続け、心に響いて来るのです。人間の歩むべき確かな道を、きちんと教えてくれます。そんな風にセヴラック協会の例会は和やかに幕を開けました。

閑話休題。

3・11の東日本大震災の惨状は底知れぬ恐ろしさを知らしめたばかりでなく、人災による原発事故の終わりなき恐怖に、ただ唾然呆然となるばかりでした。激しい揺れの中に縮まりながら、独り悦に入って甘んずるなかれ、そういわれているような気がしたものです。ですから、この例会の報告を書くことに少し躊躇いがありました。ただ、茫然自失となっていた心身の硬直から解き放たれ時からは、心は限りなき怒りに変貌していったのです。生の尊さを詩として書かずにはいられなくなりました。即、それは死でありました。

同時に何かしなければならぬと思っていましたら、編集部時代に親しくしていたフォト・ギャラリーの人からの提案があり、写真家たちが自由に持ち寄った作品を展示し、その売上金を被災地に寄付するということがあったのです。その参加に続いて、大勢のカメラマンが震災の現場に向いて撮影し、その現況を写真展として開催したのです。その売上金も寄付することになり、怒りと哀しみの中で書いた「桜よさくら」という僕の短詩も添えられたのでした。その写真展は北京に巡回しましたので、中国人にも理解してもらうため狂詩（漢詩）を書き加えて送ってもらいました。北京に続き、英訳されてシドニー、ロンドンへ巡る予定にもなっています。

例会の報告に相応しくない話題でしたが、そうした思いを吐露しなければ気持ちが前に進んでいかなかったといたらいいでしょうか。お許してください。また、この場を借りまして「桜よさくら（櫻花樹櫻花）」を掲載させていただきます。セヴラックだったらどんな曲想にしてくれるだろうかと想いつつ。なお、この短詩は館野、末吉両先生には読んでいただいております。

天使の子

鎌田和夫

微笑みの	天使たち	世界の微笑み	赤ちゃんの
悪戯の	贈り物	まどろみの	母の胸
天からの	捧げ物	天使の寝顔	団樂の
優しさの	目覚めの	揺り籠の中	
温もりの	ときめきの	テンデンバラバラ	
気まぐれの	泣き虫の	赤ちゃんは	天使の子
哀しみの	面白く		
シツチャカメツチャカ			
赤ちゃんは	百面相		
道草寄り道遠回り			
あっちに行ったり			
こっちに来たり			
好き勝手			
泰然自若			
どこまでもマシユマロ			
踏んだり蹴ったり			
引っ張ったり			
柔らかなココロ			
赤ちゃんは	自由人		

そんな心温まる楽しい情景が浮かんだのでした。その時、平原さんはどんな想いで弾いていたのでしょうか。

フィナーレは館野先生のピアノによる末吉保雄《いっばいのこどもたち》。演奏のたびに表情が変わってゆく面白さに、温かな心がいっばいになりました。子供だった時の心持に戻され、木の温もりの、どこか薄暗い淋しさの、哀しみが、しみじみと緩やかに心地よく伝わって来るのです。失われてしまった大切な時。いっばいの忘れ物をしてしまった心細い自分がいました。そんな戸惑いの中に、独り佇んでいる自分を見ていたのです。

今、僕の心の中の子供たちが悲しい詩になりました。

透明な

鎌田和夫

痛いよ	暗いよ
怖いよ	寒いよ
母さん	助けて
どこまでも木霊し	
どこまでも響き	
どこまでも漂い	
どこまでも流れ逝く	
なす術もなく	
溺れる心の	
自らを戒め	
徹底的に戒め	
透明な化け物を	
造り続ける輩を	
戒めるしかない	
暗いよ	怖いよ
寒いよ	痛いよ
助けて	母さん

NEWS

●セヴラック歌曲の CD が発売予定

パリ在住のソプラノ歌手奈良ゆみ氏と同志社女子大学音楽学科教授の椎名亮輔氏による、セヴラック歌曲の録音が発売されます。

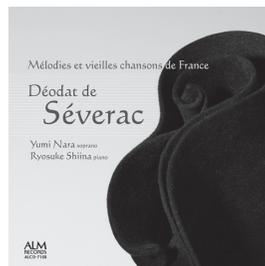
「デオダ・ド・セヴラック 歌曲と古いシャンソン」

奈良ゆみ（ソプラノ）椎名亮輔（ピアノ）

製造・発売元：ALM RECORDS/ コジマ録音

発売日：2011 年 8 月（予定）

品番：ALCD-7158 税込価格 2,940 円



編集後記

- ◆第 10 号を機会に気分一新、デザインを替えてみました。
- ◆震災と原発事故は日常の生活や意識を大きく変えました。セヴラックの生き方や音楽を通じて、未来を考えることはできないか。鎌田和夫さんに寄稿をお願いしました。
- ◆濱田滋郎先生の文章によって、セヴラックの魅力に触れた方、深みに引きこまれた方は少なくないでしょう。エッセイの連載をスタートしました。
- ◆演奏会情報を会報に掲載ご希望の方は、severac.japon@gmail.com までメールにてお知らせください。

セヴラック通信 第 10 号 2011 前期 日本セヴラック協会 会報

2011 年 6 月 25 日発行

発行：日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリーヌ・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局：松田純子◎〒 247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先：亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本：フェデックス・キンコーズ・ジャパン

